

# 隆盛を極めた北前船主の館

## 【森家】

森家は、北前船の船主として廻船問屋を営んで富を築き、「岩瀬五大家」にも数えられた旧家である。

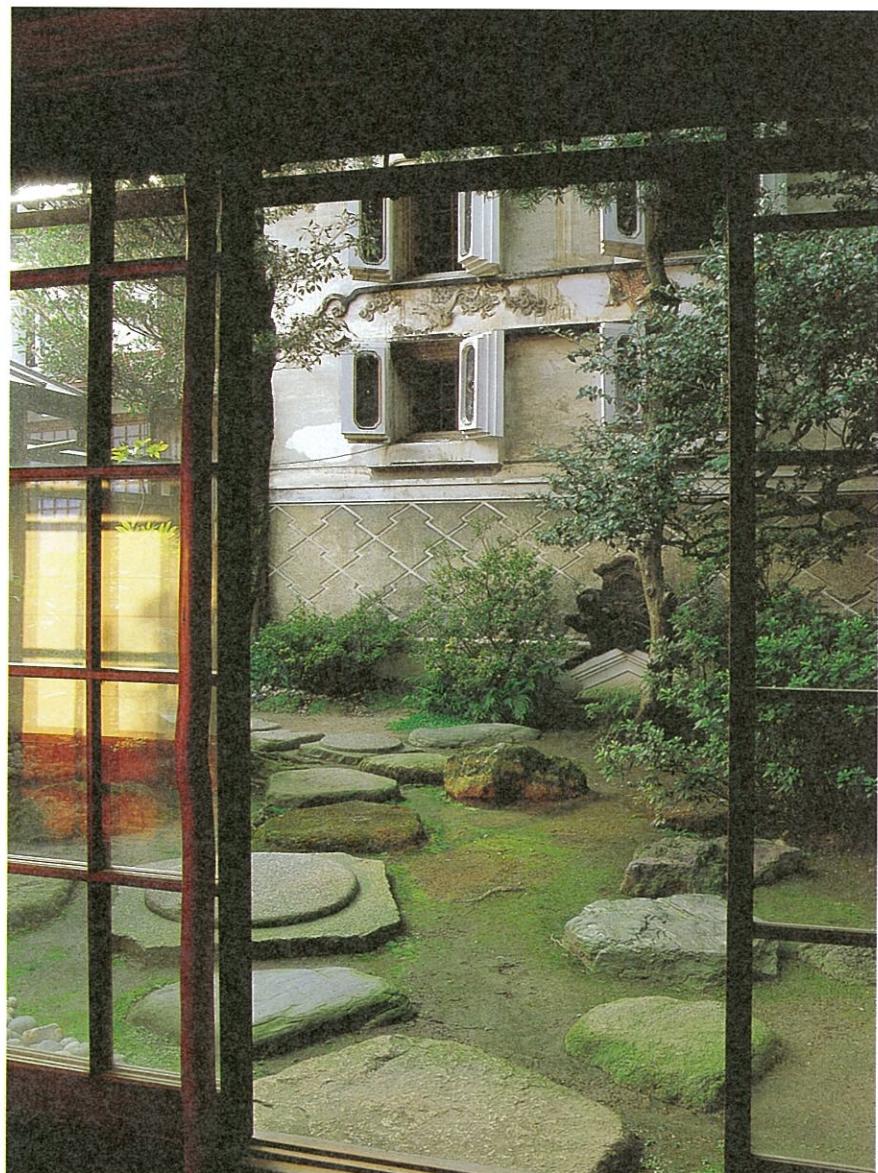
建物は明治6年(1873)の岩瀬大火の後に建てられたもので、屋敷は、東側道路に面して主屋を建て、中庭の奥には2棟の土蔵を配している。かつては、さらに奥に米蔵などが建ち、裏門に出ると船着場になっていた。

主屋は間口14.5m、奥行17.5mで、正面をミセ(商談の間)空間とし、左側には通り土間と茶の間、台所がある。右側には客用茶室、前座敷、仏間、座敷などがあり、それぞれの部屋には控の間が付く。茶室横には坪庭がある。座敷に面する奥には畳廊下があり、土庇が付いて中庭が眺められる。

外観は、旧街道に面した町家らしい庇と出格子を持つ意匠である。1階の出格子窓にはスムシコ(簀虫籠)と呼ばれる竹製の細かなブラインド機能を持つものが付けられていて、室内から見えても外からは見えないようになっている。

室内は、通り土間を入ると、15畳のオイと呼ばれる広間があり、豪壮な「梓の内」造りの木組みになっている。正面側から中庭までは壁がなく、建具を取り外すと約50畳の大広間となる。

また、土蔵の扉と中庭側の外壁には錆絵が描かれており、当時の左官技術の高さを物語っている。



オイ(広間)の造りは「梓の内」で豪壮な梁組みになっている。井桁に組んだ梁は3段重ねで、束立ちだけで小屋貫がない。北前船主にふさわしい力強い構造美は、織細な座敷空間との対比でより印象的。



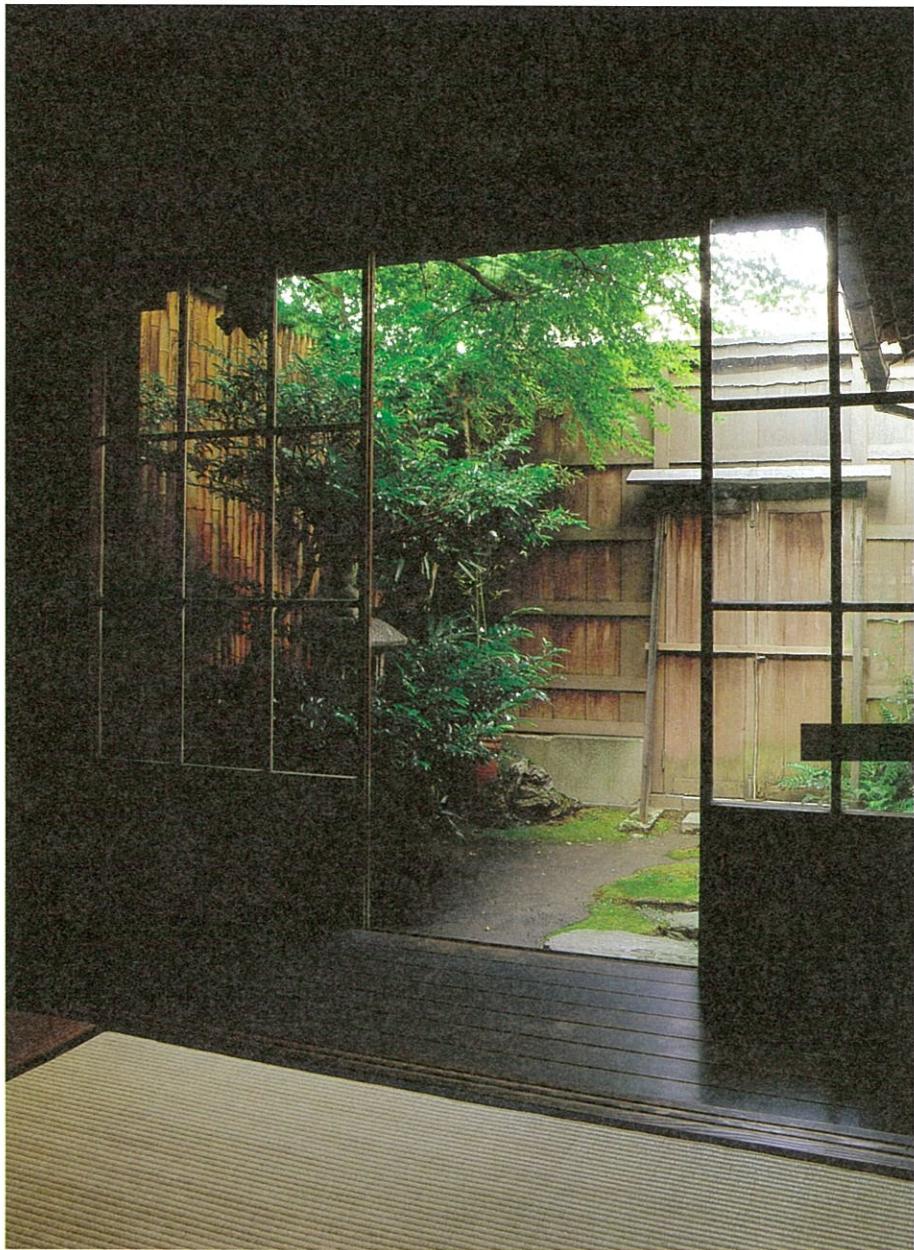
両側には類焼を防ぐための袖壁が付く。庇上には外灯(行燈型・屋号入)が置かれている。2階には上品な堅繁格子の出窓があり、庇や軒の腕木、梁や垂木の木口には化粧銅板が貼られている。



1階のスムシコ(簀虫籠)と2階の堅繁格子窓の意匠が外観を印象づける。また、むくりを付けたこけら葺きの庇が柔らかさを創出し、化粧銅板のアクセントとともに重厚な外観を軽やかにしている。







道路に面した一角を坪庭にして、戸口を開き、前座敷と茶室に接して縁側を付けている。賓客用玄関として、また商談の場として利用された空間である。縁の隅柱はなく、はね木構造としている。

観音開きの土扉を付けた窓、老松に鷹を描いた着色の錆絵、そして腰は松葉菱の研ぎ出し仕上げになっている。座敷から眺める中庭は、この土蔵の外壁がまさに大きな絵画のように演出されている。



通り土間の奥には2棟の土蔵がある。戸前も土で塗り込んだ（土蔵扉前の天井も白く塗られている）塗籠造りで、土扉には龍や虎などの錫絵が、上部には家紋が左官技術で描かれている。

